

引きこもりの美青年

— 『ドリアン・グレイの肖像』における非社交 —

A Beauteous, Solitude-loving Youth:
An Examination of Unsociability in *The Picture of Dorian Gray*

桐 山 恵 子
Kiryama, Keiko

ABSTRACT

Dorian Gray, an extraordinarily beautiful young gentleman, is no doubt the star of fashionable society in Victorian London, because his youth lasts forever thanks to his supernatural portrait becoming old instead of himself. Yet, Dorian's last moment, triggered off by the abrupt destruction of his portrait, is miserable when he dies in an attic without anyone attending his deathbed. To make matters worse, his dead body is so ugly that at first no one identifies it. This paper, through analysis of Dorian's art of socializing in *The Picture of Dorian Gray*, tries to lay bare the secret life of the legendary charming young man.

オスカー・ワイルドの小説『ドリアン・グレイの肖像』⁽¹⁾の主人公ドリアンは、輝ける美貌と洗練された物腰で、様々なイベントにひっぱりだこの社交界きっての美青年である。彼の人気ぶりは、毎朝、召使いがセーブル製陶器の盆にのせて運んでくるドリアン宛てのパーティーへの誘いや、コンサートや展覧会への招待状の多さからもあきらかだ。社交界でのドリアンはまさに「流行の最先端をいく青年」(76)である。

ところが、人々の注目の的であったはずのドリアンの最期は、屋敷のてっぺ

(1) Wilde, *The Picture of Dorian Gray*. Collins Complete Works of Oscar Wilde, pp. 17–159. この作品からの引用はかっこ内にページ数のみを示す。なお日本語訳はすべて拙訳による。

んの屋根裏部屋で、誰にもみとられることなく一人で死ぬという孤独なものだ。しかもその死体は見るに耐えない醜悪な姿をさらし、すぐには身元の確認もままならない。人々の称賛的である美青年から一転した、世間から見向きもされない孤独な老人への突然の変わりようは、いったい何に起因しているのだろうか。本論では、『ドリアン・グレイの肖像』を、ドリアンの社交術に注目して読み解いていく。そこであきらかになる彼の特質が、社交界の人気者としてのドリアンとは異なったものであることを確認した後、その特質が、彼の孤独死をまねく大きな要因となったことを証明する。

I 社交界のプリンス

社交界の花形としてのドリアンの地位を揺るぎないものにするのは、衰えることのないドリアンの類まれなる美貌である。ドリアンは画家バジルの絵のモデルをつとめた際、完成した等身大の肖像画を見て、はじめて自分の容姿を客観的に認める。そして己の美の価値に気がついた彼は、自身の容貌は決して衰えることなく、代わりに肖像画が変わればいいのにと願をかけたところ、その願いが叶えられてしまう。老いと罪により刻まれる醜悪のしるしは肖像画が背負うため、ドリアンの容貌は、どれだけ月日を重ねても20歳⁽²⁾の若い青年のまま。 「あなたはまるでプリンスのよう」とドリアンの美しさに感激し、彼の本名を知らないまま、ドリアンを「プリンス・チャーミング」(51)と呼び続けた女優シビルにみられるように、社交の場で人々の目に映るドリアンは、浮世離れた王子そのものだ。おとぎ話のハンサムな王子が決して年をとらないように、肖像画と自身の入れかわりの願いが叶えられて以来、ドリアンはおとぎの国の王子さながらに、永遠の美青年としての人生を歩みはじめる。

美しさを武器に人々を魅了するドリアンには、華やかなイメージが先行しが

(2) 絵のモデルをつとめた際のドリアンの年齢については、作品中、若干のちがいが見られるが、ここでは20歳とした。バジルによれば「ドリアンは20歳を超えている」(23)が、ヘンリー卿の叔父ファーモア卿は「まだ成年に達していない」(38)と主張している。

ちだが、ここで彼の境遇について見逃してはならない事実がある。実はドリアンは幼い頃に両親を亡くした孤児なのだ。両親亡き後、唯一血のつながった祖父も亡くなり、現在は使用人とともに屋敷でひとりで暮らしている。

ヴィクトリア朝には孤児を主人公にした物語が多く描かれたが、永遠の美青年であり続けるドリアンには、他の孤児たちとは異なった点がある。

『ドリアン・グレイの肖像』は、19世紀教養小説に対するワイルド流のパロディーだ。ドリアンは、彼以前の文学的な「孤児」、たとえばデーヴィッド・コッパフィールドやオリバー・ツイストとは異なり、経験から学ぶということがない。⁽³⁾

「なにものも恐れることなく、絶えず新たな感覚を探しもとめる」(31)と主張する、友人ヘンリー卿の快樂主義に影響されたドリアンが目指すのは、今、この瞬間に最高の快樂を得ることであり、教養小説の主人公のように、努力を積みかさねて成長し、大人になってなにかを成し遂げることではない。ディケンズの描いた孤児たちが、苦勞して生きる術を学び、その過程で生涯の伴侶とめぐりあい新しい家庭を築くのとは反対に、成長することを拒んだドリアンは、38歳の生涯で結婚したり子孫を残したりすることはない。ドリアンと血縁関係にある存命の人物もとくに現れず、彼は天涯孤独の身なのだ。

親戚のない独り身の状態では、脈々と続いてきた伝統ある貴族としての名声を失ってしまう恐れがあるが、「ドリアンは、若さと美は永遠であり得ることを、身をもって証明する歩く広告塔⁽⁴⁾として、社交界での花形の地位を維持し続ける。ご婦人方はドリアンに夢中になりこぞってパーティーに呼びたがるし、青年たちはドリアンこそ自分たちの美の理想だとして必死に彼の真似をしようとする。ドリアンは社交界のプリンスとして活躍することにより、血縁関係がな

(3) Sammells, p. 60.

(4) Bowlby, p. 183.

い自身の不安定な境遇を補っているのである。

II パーティー

社交界で絶大なる人気を誇るドリアンではあるが、25歳を過ぎた頃から、「プリンス・チャーミング」の愛称にはおよそ似つかわしくない、悪いうわさが流れはじめるといわれる。というのも、社会的には罪悪とみなされるような経験にも、独自の魅力があることを知ったドリアンは、阿片窟や売春宿に出入りしたり、盗人や偽金作りとつきあったりするようになるのだ。⁽⁵⁾ 彼はいかがわしい場所へ出入りするときには変装したり偽名を使ったりするが、それでも素性を完全に隠しとおすことはできず、社交界のなかにはドリアンに対して陰口をたたくような人も現れはじめていた。

血縁関係のないドリアンにとって、社交界での人脈維持は必要不可欠であり、そこでの信頼の損失はゆゆしき事態だ。しかしドリアンは、あせることなく巧みな対応をみせる。うわさが流れる社交界を逆に利用して、自身への疑惑を払拭するのだ。そしてその方法は、「社会的地位のあらわれ」⁽⁶⁾ であり、「19世紀後半には、神格化されるまでにいたったディナー・パーティー」⁽⁷⁾ の開催だった。

ディナー・パーティーは、その家の趣味や審美眼、銀行の貯蓄高、人脈を指し示す、ヴィクトリア朝のおおいなる威信のシンボルの

(5) Nassaar は、「ドリアンが求めたのは悪に存する美であり、彼は美の探究において、ますます悪の感覚に依存していくようになる」と述べている。Nassaar, p. 56.

(6) Strong, p. 289.

(7) Strong, p. 294. さらに Strong は「社交界での出世の足がかりとして、ディナー・パーティーの開催はもっとも近道であり、パーティーでの名声の獲得こそが、上流社会での自分の保証につながった」と指摘する。ディナー・パーティーの準備、食事内容、マナーなどの詳細については、Damon, pp. 51-54, Pool, pp. 72-77 を参照。またワイルドの喜劇『つまらない女』のダンディーな紳士イリングワース卿のセリフは、パーティーの重要性を説いたものとして有名である。立身出世を夢見る青年に、成功の秘けつを聞かれたイリングワース卿は、「ロンドンのディナー・テーブルを支配するものは、世界を支配する」と返答する。Wilde, *A Woman of No Importance*, p. 493.

ひとつである……それは公の社会的な関係性における実践の場であり、その家の洗練された優雅なマナーのレベルをあらわしている。室内装飾、服装、使用人の数と質、テーブルの飾りつけ、ゲストと料理の選択、これらすべては、客人にいかにか感銘を与えるかを表す指標である。⁽⁸⁾

私生活では悪徳にふけるドリアンも、社交界では、名門貴族の威信をかけて、「上流階級にとっては、週一回の開催がごく一般的」⁽⁹⁾とされたパーティーをぬかりなく実施している。

すくなくともドリアンは、社会との関係においては向こう見ずではなかった。冬の間は月に一、二回、社交シーズン中は毎週水曜日に、美しい邸宅を開放し、その時もっとも人気がある音楽家たちをまねいて、芸術の驚異で客人たちを魅了した。ヘンリー卿がつねに手助けしていたドリアン主催のちょっとしたディナーは、招待客の選別と座席の配置、凝ったテーブル・クロスの上に並べられた金や銀のアンティークの皿、異国の花々と神秘的な調和をかもしだすテーブル・デコレーションの素晴らしい趣味で名高かった。(98)

ヘンリー卿が言うように、「まずいディナーやワインを提供した人間の私生活が、どれほど清廉潔白であるかを聞かされたところで、なんの慰めにもならない」(107)のなら、誰もが称賛せずにはいられない完璧なパーティーを主催した人間の私生活における不道徳など、なんの問題にもならない。なぜなら、「社交界ではモラルよりマナーの方が重要であり、品行方正を自慢したところで、それは腕利きのシェフを雇用していることに比べれば、ごくわずかの価値しか

(8) Strong, p. 293.

(9) Strong, p. 293.

ないのである」(107)。

ドリアンは社交界の花形の地位さえ維持していれば、自身の不品行に関するうわさなど、取るに足りないことを心得ていた。そして実際、「社交界でささやかれる悪評は、多くの人の目には、かえって彼の一風変わった危険な魅力を増すばかり」(107) というよい効果まで生み出すのだ。

しかし、華麗なパーティーのホスト役を見事に務めているように見えるドリアンにも、唯一不足していると思われるものがある。それは、「ディナー・パーティーの真髓とされた会話」能力だ。⁽¹⁰⁾

会話に秀でていることの重要性は、決して強調されすぎることではなく、あらゆるエチケツト本には、それに関する長々とした記述がある。実際、ディナー・パーティーは、会話名人という新しい人物造形を生み出した。パーティーの成功には、会話の第一人者の存在が必須となったため、ディナー・パーティーへの熱狂は、会話上手な人間の獲得をめぐる、新たな社会競争の場を形成した。⁽¹¹⁾

ドリアンがホストとしてもゲストとしても、パーティーの花形であり続けたことはまちがいない。しかし、言葉巧みなヘンリー卿に影響され、その言葉の実践をこころみるドリアン本人は決して会話が得意ではない。たとえば、ヘンリー卿の叔母アガサ夫人主催のパーティーでは、食事中、ドリアンは一言も話さず、ひたすらヘンリー卿を中心とした他人の会話を聞き続ける。ドリアンがようやく口を開くのは、パーティーも終わり、公園に向かおうとするヘンリー卿に対して、「ぼくも一緒に連れて行ってください」(44) と述べるたった一言だ。また「ボタン・ホールにパルマ産すみれを飾った完璧な着こなし」(127) で出席したナルバラ夫人のパーティーでのドリアンは、「上品なお世辞」(128)

(10) Strong, p. 306.

(11) Strong, pp. 306-307.

は述べるものの、その後、「来たことを後悔する」(129)ほど会話ははずまず、ヘンリー卿が現れてようやくほっとするといった事態である。さらに田舎の豪邸でハウス・パーティーを開催中のドリアンは、モンマス公爵夫人に人生の秘けつを問われた際、気のきいた返答のひとつも出来ないどころか、「ぼくはいつもハリーに同感なんです」、「ハリーの意見は決してまちがっていないから」(142)と完全にヘンリー卿頼みなのだ。

つまり、ドリアンが機知に富んだ洒落や洗練された皮肉で、周囲の人々を楽しませるような場面はこれといってなく、パーティーの場での彼はむしろ無口な聞き手にすぎない。いうまでもなくドリアン主催のパーティーで、会話を受けもっていたのはヘンリー卿であり、ドリアンには、ヘンリー卿のように、人々との語らいを楽しむ様子は見うけられない。

社交界でのドリアンは、絶対的価値は、変化することのない美貌、すなわちドリアン自身であり、ドリアンは会話ではない。ヘンリー卿が、大勢の人々が集うパーティーこそ、自身の才覚を最大限に生かせる場と考え、そこでの会話に快感を得ていたのとは異なり、ドリアンは社交の場に心からの快樂を見いだしてはいない。ドリアンにとっての社交とは、血縁関係のない不安定な状況を補うにせよ、悪評を打ち消すにせよ、自分にとって好ましくない状況を相殺する有効な手段であり、パーティーそれ自体に、ヘンリー卿ほどの快樂を見いだしてはいないのだ。

III 仮想体験

社交界の人気者であり続けるドリアンにとって、人々との交流がそれほどの快樂をもたらさないのでしたら、彼が本当の喜びを感じられる場とはどのようなものなのだろうか。それを探る手がかりは、ヘンリー卿がドリアンに贈った一冊の本にある。ドリアンは、「それから数年間、この本の影響から脱することができず」、「内容全体が、彼が生まれる前に書かれた、自身の伝記のように思える」(97)ほど、時を忘れて本に没頭する。

登場人物はただ一人のその本は、プロットのない小説で、実のところ、あるパリの青年の心理学的研究書といった内容だった。19世紀に生きるこの青年は、人生をかけて、自分が属する世紀以外のあらゆる情念と思考方法を実現しようと試みる。いってみるならば彼は、この世のあらゆる精神が体験してきた多種多様な気分を、自身のなかに取りこもうとしたのだ。(96)

一般的に「伝記」とは、主人公の生涯にわたる出来事を叙述するため、起伏に富んだ物語になりがちである。ところが、ドリアンが自らの「伝記」と呼んだこの本は、起承転結どころか、きちんとしたプロットすらもっていない。つまり、ドリアンにとっての理想の「伝記」、追い求めるべき生き方とは、このパリの青年のように、空想するだけで行動しない人生であったことが判明する。快樂を追求するドリアンは、自身の変わらない美貌を生かして、これまで善悪問わずさまざまな経験をしてきたが、実は、彼にとっては、現実で実体験することと同様に、もしくはそれ以上に、空想のなかで仮想体験することが重要だったのだ。

事実、ドリアンの仮想体験は、ますますエスカレートしていく。彼は屋敷を博物館であるかのごとく、収集した貴重な宝石や香水、めずらしい楽器や中世のタペストリー、神秘的な宗教の道具などで埋めつくしてしまう。そして、それら収集物をいっさい他人に公開したりせず、すべて自分だけの快樂のために屋敷内にかくまうのだ。「人と人とをつなぐ機能が失われた芸術品は、私的な経験が積みかさなった収集家個人のもの⁽¹²⁾となり、屋敷に引きこもったドリアンは、「収集したあらゆる宝石を、ケースから出してはまたしまったりして、日がな一日過ごすのだ」(102)。

世界中から集めた芸術品にかこまれるドリアンは、たしかに、「手に触れて、

(12) Brown, p. 78.

確認することのできる美しいものを愛している」と収集物そのものへの愛着を示すが、「しかし、それらが創りだす、すくなくともそこに啓示される、芸術的な気質の方が、私にはずっと多くの意味がある」(87) とつけたすことを忘れない。つまりドリアンにとっては、集めた物それ自体よりも、それらで満たされた空間から生みだされる空想の中で、あらゆる情念を仮想体験することが肝要だったのである。

IV 屋根裏部屋

大勢の人々が集う社交の場に喜びを見いだすというよりは、孤独な空想のうちに充実した時を得ているドリアンが、屋敷内でもっとも長時間を過ごしたと思われる空間がある。それは彼の身代わりとして変化する肖像画が置かれている場所だ。肖像画は完成した当初は、屋敷の一階に置かれていたが、肖像画と自身の入れかわりの願いが叶えられ、肖像画の方が醜く変化することに気がついたドリアンは、訪問客や屋敷の使用人に絵を見られることを恐れるようになる。そこでまず絵の前についたてを置くが、それでは不十分であると考え、とうとう肖像画を別の場所に移動させることに決める。そしてその隠し場所として選ばれたのが、屋敷の最上階にあり、長い間、開かずの間となっていた屋根裏部屋だった。

ドリアンは、肖像画は紛失したと言いはり、他人の目からは絵を完全に隠してしまうが、彼自身は、醜くなる一方の肖像画とますます離れがたくなる。というのも、「昔と変わらないままの部屋と、それが隠しもつ腐敗したおもちゃは、ドリアンにとって快樂の源⁽¹³⁾」となり、彼は「おもちゃ」である肖像画と戯れるために、屋敷のてっぺん目指して階段をあがっては、屋根裏部屋に閉じこもるようになるのだ。⁽¹⁴⁾

(13) Varty, p. 121.

(14) 肖像画の空間移動についての詳しい考察は、拙著を参照。桐山、第4章『肖像画の軌跡—「ドリアン・グレイの肖像」におけるゴシック的空間—』, pp. 89–105.

このように、醜く成長する肖像画とともに、成長が停止した美しいままのドリアンは屋根裏に引きこもるようになるが、実はドリアンがこの部屋に引きこもるようになったのは最近のことだけではない。屋根裏はドリアンのかつての子供部屋であり、いまだに「部屋を見まわす彼の心に、孤独だった少年時代の一瞬一瞬がよみがえってくる」(94)ほど、多くの時間をここで過ごしたのである。

ドリアンの幼少期の孤独な思いは、部屋に置かれた家具にも刻まれている。たとえば、織りこまれた中世の王侯貴族の物語を、細部にいたるまで記憶しているフランドル製タペストリーは、ドリアンがそのタペストリーと長時間向きあい、ひとり物思いにふけていたことを証明する。さらに、今は光沢を失ったイタリア製衣装箱の中に入っていたのは、本来の用途にかなった洋服ではなく、「その中に身をひそめて隠れていたドリアン自身」(94)だった。

すでに見たように、ドリアンは両親を早くに亡くしているが、その事態をまねいたのは、祖父ケルソー卿である。ケルソー卿は、自分の娘の結婚相手である貧しい下級士官が気に入らず、わなをしかけて故意にドリアンの父を殺害したのである。夫の後を追うようにドリアンの母も亡くなったため、ドリアンは唯一の親族となったケルソー卿とともに屋敷で暮らすことになった。しかし、許せない結婚から生まれた孫のドリアンを、ケルソー卿は愛することができず、できるだけ自分の目につかない屋敷の最上階の屋根裏にドリアンを追いやったのである。そして孤独な少年時代を送ったドリアンが、祖父亡き後に屋根裏を離れて以来、その部屋は開かずの間となったのだ。

つまりドリアンは、かつて祖父の目をわずらわせないように、自身が隠されていた屋根裏部屋に、今度は自分の意思で肖像画を隠し、さらに幼少期と同じようにそこに引きこもるようになったのだ。というのもドリアンは、醜く変化する「画布上の邪悪で年老いた顔」と以前とまったく変わらない「ほほ笑みを浮かべる美しい青年の顔」を見比べることに、「つらぬかれるような快楽の感覚」(98)を見いだすようになるからだ。完成した当初、鑑賞者を楽しませた一級

の芸術品だった肖像画は、いまやドリアンだけが使用可能な「おもちゃ」へと変わってしまったのである。

外界から切り離された空間で、孤立を強めていくのは肖像画だけではない。「おもちゃ」と戯れる快樂にとりつかれたドリアン本人も、大勢の人々が集う社交の場から遠ざかっていく。

外部との接触は途絶えてしまう。扉には鍵がかけられ、窓は閉ざされ、カーテンは引きさげられたままだ。屋敷でのドリアンの生活は不自然に人為的なものとなり、それは、彼の友人たちが送る通常の生活とは、あきらかに対象的⁽¹⁵⁾だ。

これまで以上に人づきあいを避けるようになったドリアンは、それを裏づけるように、ヘンリー卿と共同で所有していたトゥルヴィルの別荘や、何度も冬をそこで越したアルジェリアの白壁の家を手放してしまう。ドリアンにとっては、気候のよい明るい土地で友人とヴァカンスを過ごすよりも、芸術品で埋めつくされた屋敷に引きこもり、扉も窓も閉ざされた暗い部屋で、自身の肖像画とひとり向きあい、そこから生まれるさまざまな情念に身をまかせている方が、よほど刺激的な快樂を得られるのである。

なぜなら『空間の詩学』においてバシュラールが主張するように、「情念は、孤独において、ふつつつと煮えたぎる。情念を煮えたぎらせた人間は、孤独のなかで、爆発と偉業の準備をしている⁽¹⁶⁾」からだ。ドリアンの情念は、社交的な場においてではなく、孤独な状態に身をおいてこそ、より熱く燃えさかるのだ。

さらにバシュラールは、孤独と屋根裏部屋との関係について、次のように述べる。

(15) Brinzeu, p. 24.

(16) Bachelard, p. 9.

過去にわれわれが数々の孤独な瞬間を体験したあらゆる空間——孤独に苦しみ、孤独を楽しみ、孤独を欲望し、孤独と歩みよった——そういった空間は、まさにわれわれ人間が、それらが残存することを望むがゆえに、消えることなく、われわれのうちに残っている。孤独と結びついた空間が創造的であることを、人間は本能的に知っているのだ。たとえその空間が、現在からは永久に追放されてしまったとしても。それゆえ、その空間が未来のあらゆる約束とは無関係であったとしても。さらには、もはやわれわれが屋根裏部屋をもたなくなり、屋根裏が失われ、消えてしまったとしても、過去にわれわれが屋根裏部屋を愛し、そこに住んでいたという事実は決して消えない。われわれは夜ごとの夢で、その空間にかえって⁽¹⁷⁾いく。

ここで注意すべき点は、ドリアンは、孤独だった過去を記憶として愛おしみ、夜ごとの夢で屋根裏部屋にかえるのではなく、現実にもまだ屋根裏に閉じこもっているという事実である。そこに閉じこもることが許された子供時代はとうの昔に過ぎさり、外見こそ変わらないものの、すでに中年にさしかかろうかという年齢のドリアンにとって、屋敷のてっぺんの暗く狭い屋根裏が適切な場所であるはずはない。それを強調するように、外界との接点を失った「ドリアン」の空間は、極端なまでに縮小していく。空間はますます狭く閉鎖的になり、ついには完全に消滅すると思われる。⁽¹⁸⁾

では、狭くなる一方の空間がついに消滅すると思われる時、そこに引きこもっているものも同時に消滅してしまう危険はないのだろうか。そしてその危険は現実のものとなる。なぜならドリアンは、まさに彼が引きこもり続けた屋根裏部屋で、完全に尽き果ててしまうからだ。

(17) Bachelard, p. 10.

(18) Brinzeu, p. 24.

V 孤独死

外界との接触が断たれた屋根裏部屋が象徴するように、にぎやかな社交の場より、暗い閉所での孤独を愛するドリアンが、友人たちと疎遠になっていったことはすでに見た。なかでも道徳的に正しくあることを説くバジルに対しては、ドリアンはうとましい気持ちが強くなり、長い間、顔をあわせることすらなくなっていた。ところがそんなある晩、ドリアン⁽¹⁹⁾の社交界での悪評を心配し、突然バジルが訪ねてくる。モラリストであるバジルにとって、ドリアン⁽¹⁹⁾の悪評は、彼の魅力を増すちょっとしたスパイスとしては作用せず、悔い改めるべき非難の対象でしかなかった。悪評の真偽をたしかめるために、本当のドリアン⁽¹⁹⁾の姿を見たいと叫んだバジルに対して、とうとうドリアンは閉ざされた屋根裏の鍵をあけ、自身の罪業が刻まれた肖像画をバジルに見せてしまう。そして肖像画の変貌ぶりに動揺し、ドリアンを非難するバジルに腹を立てた彼は、思わずそばにあったナイフで、バジルをめった刺しにして殺害してしまうのだ。

芸術においては善悪の区別など無効であると考えていたドリアンは、これまでも社会的に判断すれば罪に相当するような行いを重ねてきた。しかし、このバジル殺害は、悪の妖しい魅力をともなった芸術的殺人ではなく、ドリアン本人が、激情にかられて理性を失った狂気の沙汰だったと認めるほど、低俗な恥ずべき行為でしかなかった。「画家バジルに飛びかかり、耳の後の大静脈にナイフを突きたて、同時にバジルの頭を机に押しつけて、さらに何度も何度も刺

(19) ワイルドは評論「ペン、鉛筆と毒薬—緑の研究—」において、芸術家であり毒殺殺人者でもあった Thomas Griffiths Wainwright について、「彼の犯罪は、彼の芸術に重要な効果をおよぼしたと思われる。犯罪は彼のスタイルに強烈な個性をあたえたが、それは初期の作品にはたしかに欠けていた性質だった」と述べ、芸術におよぼす罪の効果を評価している。Wilde, “Pen, Pencil and Poison — A Study in Green —”, p. 1106. またワイルドの短編「アーサー・サヴィル卿の犯罪—義務の研究—」には、芸術的殺人をくわだてる青年貴族が登場する。Wilde, “Lord Arthur Savile’s Crime”, pp. 160–183. 詳細は拙著を参照。桐山, 第2章『芸術としての殺人—「アーサー・サヴィル卿の犯罪」の手相占い分析—』, pp. 45–66.

した」(117)と記述されるバジル殺害時のドリアンは、快樂を追求する美青年どころか、あたかも長期間の引きこもりの結果、社会性を喪失して突発的行為におよんだ錯乱者のようだ。

「ドリアンは、教養小説のヒーローがたどる伝統的運命を拒絶し、社会的規範にてらしあわせて自身を認識できなかったこと⁽²⁰⁾と指摘されるように、一時の激情にかられて、前後の見境なくバジルを殺してしまったドリアンには、広く社会とかかわりあい、そこで得た実体験から学ぶという重要な成長過程が抜けおちていた。ドリアンは、幼少期にのみ住むことが許される、社会的規範の枠組みから逃れた屋根裏をいまだに卒業できない、成長がとまったままの子供なのだ。

ところがおもしろいことに、屋根裏でバジルを殺害した時のドリアンの実年齢は、不必要と思われるほどに強調されている。バジルがドリアンを心配して訪ねて来た日は、「ドリアンは38歳の誕生日の前日、11月9日だった」(110)と明確な記述があるのだ。ドリアンがバジルを殺害したのは深夜のため、すでに日づけが変わった次の日、38歳誕生日当日に、ドリアンは殺人者となってしまったのである。

おとぎ話の王子は、最大の社交パーティーともいえる結婚式で物語を終えるため、それ以上、年をとる恐れはない。しかし「プリンス・チャーミング」というには、実際にはあまりに年をとりすぎ、純粋無垢な王子にはまったく似つかわしくない血まみれの殺人まで犯してしまった38歳引きこもり男性の物語に、どのような結末を与えればよいのだろうか。

悪の道から足をあらひ、「プリンス・チャーミング」にふさわしい清廉な人生を歩むためには、血に染まった屋根裏から脱し、社会的に復帰を果たす必要がある。しかし醜く変化する肖像画が屋根裏に引きこもっている限り、自身もそこから離れることのできないドリアンは、社会復帰のためには、もはや肖像画そのものを消しさるしかないと考える。そしてバジルを亡きものにしたよう

(20) Kaye, p. 57.

に、同じナイフを肖像画に向かって突きたてるのだ。

しかしドリアンの期待とは裏腹に、その結果ひきおこされたのは、肖像画ではなく、ドリアン自身の消滅だった。美青年のまま引きこもっていたはずのドリアンの肉体は、その瞬間、成長しすぎた、しわくちゃな老人へと一気に変わり果ててしまう。彼の死体は、胸にナイフが突き刺さったまま屋根裏の床に転がった状態で発見されるが、すぐには身元の確認もできない。親族も存在しないまま、社交の場から遠ざかり、長期にわたり、ひとり閉所に引きこもっていた老人の素性など、誰も知らないのである。

最終的に死体の身元は、手の指にはめられていた指輪により判明するが、「ひからびて枯れ果てた、しわくちゃの、見るに耐えない容貌」(159)のドリアンからは、人々を魅了した「プリンス・チャーミング」の面影はいっさい見いだせない⁽²¹⁾。いうまでもなく、ドリアンは美を失った瞬間に、社交界での花形の地位も喪失したのである。それでは、つぎに社交界の人々の話題の的となるのは、いったい何なのだろうか。

ドリアンに代わり、新たな花形の地位を獲得するのは、この世のものとは思われぬ至高の美を有した一枚の肖像画である。完成した当初は、その美しさで評判を呼び、展覧会への出品依頼まであったにもかかわらず、長らく所在不明とされてきた肖像画の再発見は大きな話題となり、その類まれなる美貌は再び社交界を席卷するにちがいない。

すなわち、最終的に引きこもりから脱し、見事な社会復帰を遂げるのは、ドリアンではなく肖像画の方だった。血に染まった悪をあらい流し、「プリンス・チャーミング」にふさわしい純粋無垢な美貌を回復した肖像画は、堂々と屋根裏部屋を出て、展覧会で人々からの称賛のまなざしを集めるだろう。他方、38歳の生涯を、実年齢よりもさらに老けた、あまりに醜悪な姿をさらして終えた

(21) Heath は、ドリアンの最期の容貌について、「38歳にしては不自然なまでに老化がすすんでいる」と指摘している。Heath, p. 162.

ドリアンの存在は、社交界のタブーとしてつかの間うわさのぼった後、いずれ忘れさられるにちがいない。いや、それ以前に、家族も親戚もないドリアンにとっての最後の社交界の一大イベント——自身の葬儀——を、いったい誰がとりおこなうというのだろうか。美を失ったドリアンに、ヘンリー卿が興味を抱くわけではなく、善き友だったバジルはすでにこの世にいない。社交よりも孤独を愛し、成長のとまった子供のまま屋根裏に引きこもり続けた美青年が負った代償とは、社交界からつきつけられた、社会性を喪失して錯乱した、醜い引きこもり老人という、屈辱的なレッテルだったのである。

参考文献

- Bachelard, Gaston. *The Poetics of Space: The Classic Look at How We Experience Intimate Places*. Trans. Maria Jolas. Boston: Beacon, 1994.
- Bowlby, Rachel. "Promoting Dorian Gray." *Oscar Wilde: A Collection of Critical Essays*. Ed. Jonathan Freedman. New Jersey: Prentice Hall, 1996. 178–192.
- Brinzeu, Pia. "Dorian Gray's Rooms and Cyberspace." *Rediscovering Oscar Wilde*. Ed. C. George Sandulescu. Buckinghamshire: Colin, 1994. 21–29.
- Brown, Julia Prewitt. *Cosmopolitan Criticism: Oscar Wilde's Philosophy of Art*. Charlottesville: UP of Virginia, 1997.
- Damon, Duane C. *Life in Victorian England*. Detroit: Gale, 2006.
- Heath, Kay. *Aging by the Book: The Emergence of Midlife in Victorian Britain*. New York: Suny, 2009.
- Kaye, Richard A. "Sexual identity at the fin de siècle." *The Cambridge Companion to The Fin De Siècle*. Ed. Gail Marshall. Cambridge: Cambridge UP, 2007. 53–72.
- Nassaar, Christopher S. *Into the Demon Universe: A Literary Exploration of Oscar Wilde*. New Haven: Yale UP, 1974.
- Pool, Daniel. *What Jane Austen Ate and Charles Dickens Knew: From Fox Hunting to Whist – the Facts of Daily Life in 19th-Century England*. New York: Touchstone, 1993.
- Sammells, Neil. *Wilde Style: The Plays and Prose of Oscar Wilde*. Harlow: Pearson, 2000.
- Strong, Roy. *Feast: A History of Grand Eating*. Orlando: Harcourt, 2002.
- Varty, Anne. *A Preface to Oscar Wilde*. London: Longman, 1998.
- Wilde, Oscar. "Lord Arthur Savile's Crime — A Study of Duty — ." *Collins Complete Works of Oscar Wilde*. Glasgow: Collins, 2003. 160–183.
- . "Pen, Pencil and Poison — A Study in Green — ." Works. 1093–1107.
- . *The Picture of Dorian Gray*. Works. 17–159.
- . *A Woman of No Importance*. 465–514.

桐山恵子, 『境界への欲望あるいは変身—ヴィクトリア朝ファンタジー小説—』, 世界思想社, 2009年。